S・A・P　～　Spirit and Power　～

神威メルブラ勢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓ・Ａ・Ｐ　～　Ｓｐｉｒｉｔ　ａｎｄ　Ｐｏｗｅｒ　～

【Ｎコード】
Ｎ９３０６Ｅ

【作者名】
神威メルブラ勢

【あらすじ】
異能を隠し生きる少年、その前に組織の人間を名乗る美少女が現れる・・・。暗い過去を持ちながら生きる少年と光の組織に所属する美少女。その２人が出会いそして大きな運命の波に巻き込まれていく・・・、そんなお話です。

プロローグ

プロローグ

「死ねぇ！！！」

ズッガーン！！！！！

「ガハッ！！」

また一人その冷たい倉庫の床を舐める事となった。

そこには1人の少年と２０人あまりの男達が対峙し，その横には肉の塊が山となっていた・・・。

少年の顔には微笑が，男達の顔には恐怖がそれぞれ張り付いていた。

「クックック，その程度か・・・。その力でデビルを名乗るなど片腹痛い！！」

少年は嘲笑するかのように言い放った。

「弱きものに生きる価値など，ない！このオレが吹き飛ばしてやろう」

炎よ，その神聖なる力をもって彼の者たちに永遠なる安眠を！

Ｅｒｕｐｔｉｏｎ！！（爆破）

ズッッッガーン！！！！！！

グオッッッ！！！
炎が荒れ狂い男達を飲み込んだ。
炎がおさまる頃，男達の姿は何処にもなかった・・・。

「フンッ！蒸発し，この星の一部となれたんだ，ありがたく思え」

少年は，そうつぶやくと闇の中へと消えていった・・・。

それから2年たった現在・・・

第1話　『新しい生活と・・・』

第1話　『　新しい生活と・・・　』

ジリリリリッ！

「う～ん・・・うるさいなぁ。」

けたたましい電子音とともに，一人の少年の気の抜けた声が部屋に響いた。

「うるさいって言ってるだろ！！」

そう少年が言った瞬間，電子音という騒音を撒き散らした時計（俗に言う目覚まし時計）が炎に包まれた。

「あっ，またやっちまった・・・」

少年は心底困ったような声を上げた。

「こいつがねえと起きられないのに・・・・。」

ちなみにこれで5台目である。
どうでもいいが，炎の横で独り言を言う少年の姿はどこか滑稽であった。

「あっ，自己紹介が遅れたな，オレの名前は　筧　総牙，私立白風学園の1年だ。信じられないだろうがオレには他人にはない力がある。オレはその力を『想力』と名づけた。
この力は自分の想像したことを実際に作り出すことが出来るんだ。
さっきの炎もそのせいってわけ。この力のせいで過去には色々あった・・・・。」

またまたどうでもいいが今日は9月1日，すなわち2学期初日である。

「って，このままじゃ遅刻だ!!翔魔，堕魔，行くぞ!!」

そう少年が叫ぶと，なんと双剣は総牙の影へと消えていった・・・・。
これも総牙の能力のひとつ，『暗納』という技で自分の影に小規模な異空間を作り出すことが出来るとっても便利（笑）な技なのだ。
また，翔魔と堕魔とは代々双牙双剣流正統後継者に継がれる祐所正しき双剣である。
原理までは分からないが自我を持ち，言語を操る。

「おっと，めがね忘れた。根暗を演じるならこれがないとね。」

良く分からない言葉を残しながら総牙は玄関へと消えていったのであった・・・。

場所は変わって白風学園，１年Ｓ組

「よっ！」

教室の片隅にある自分の机にカバンを置いたとき，聞き覚えのある声が聞えた。

「・・・なんだ，文哉か。」
「なんだとは何だ！せっかく挨拶したってのに。」
「あれを挨拶というのはお前ぐらいだ・・・。」

いきなり話しかけてきたこの男，名を　『宮本　文哉』という。
なんとあの宮本武蔵の末裔だというから驚きだ。

「毎回思うんだが，そのめがね伊達か？」
「ああ，だったらどうしたんだ？」
「いや～，超がつくほどダサいぞ・・・。」
「分かっているさ，でもめがねって根暗の象徴って感じがしないか

？」

それはない，かなりの偏見である。

「まぁ，わからんではないが・・・。せっかくなかなか良い顔してるんだからさ，コンタクトにしたら良いのに・・・。」
「ふんっ，白風のジャニーズとまで言われたお前に言われるとは光栄だね。」

そう，この文哉と言う男，顔は超S級の美形でしかも剣道部の副将をやっている。
密かにファンクラブまであるとか・・・。

「まぁ，あの力を隠すにはちょうどいいのかもしれないが・・・。」
「ふんっ，分かっているなら言うんじゃない！」
「悪い，悪い」

っとそこに

「「「文哉君～！そんな根暗ほっといてこっちで遊びましょうよ～！」」」

見るとクラスの女子のほぼ全員が集まっていた。

「・・・」
「クックック，もてるって辛いねぇ。」
「黙れ・・・。」
「さっさといってきなよ，文哉クン？」
「・・・分かったよ！じゃあな。」
そう言い捨てると文哉は教室の外へと消えていった・・・。
「悪いな文哉，オレは表舞台に立たないと決めたんだよ・・・。」

そう言う総牙の声はわずかに震えていた・・・。

第2話　『天然少女と水』

第2話　『　天然少女と水　』

ザアァァァ！！！
午後4時半，俗に言う下校時間である。
総牙は立ち尽くしていた・・・。

「くそっ！カサを忘れるとは・・・。」

しかし，助けようとするものはいない，学校での根暗な性格を演じている効果が大きいのだろう・・・。
残る方法は2つ，濡れて帰るか，カサを買うか，だ。

「しかたがない，濡れながら帰るか・・・。」

・
・
・

「っく，買うべきだったか・・・。」
雨脚は収まるどころか勢いを増し，総牙へ猛威を振るうのであった・

・・・。

「・・・おかしい，この雨，僅かだが魔力が感じられる・・・・。」

ちょうどその時である，

ズッガーン！！！

町の外れにある丘の上で大きな爆発がおこった。

「！！！！！」

（これはっ，魔力！なぜこんな所に・・・・。）

その時，２つの影が丘から１つの空き家へと飛び入るのが見て取れた。

とはいっても，並の人間には風が通ったぐらいにしか感じないが。

「いったいこの町で何が起こっているんだ・・・・。」

（まぁ，俺には関係ない，さっさと帰るか・・・・。）

言葉とは裏腹に彼の中ではもう既に興味の対象ではなくなっていた。

（（（（（おいっ！この魔力，あの時と似ているぞ！！！））））

翔魔と堕魔に言われ，心臓を鷲づかみにされるような感覚に陥った。

（あいつらが復活した・・・？いやっ，そんなはずがない！あいつらはオレがこの手で・・・・。）

「兎に角，見に行って見るか・・・・。」

総牙は影が入っていった空き家へと消えていった・・・・。

中では，大柄な男と自分と同い年ぐらいの可憐なる美少女が対峙していた・・・。
しかし，双方は大きく異なっていた。
大柄な男は下劣な嘲笑を浮かべ，少女は，恐怖と愕然が見て取れた。

「クックック，先程の爆発にはちと驚いたが，詰めが甘いわ！」
「っく・・・。貴様っ！！！」

どちらが優勢かはもう言わずとも分かるだろう・・・。
（近づいて分かったが，この魔力，微妙に違う・・・，いや，武器自体が発している。なるほど，奴らが作った聖武器か・・・。）
一通り状況を把握した総牙だったが，当然疑問が沸く。
（奴らはオレが潰したはずだ・・・。何故あの武器が残っている・・・？）
総牙の中では疑問が沸いては消え，沸いては消えしていた・・・。
その頃，２人は・・・

「貴方，何者よ・・・。この雨といい，その力といい一団員ではないでしょう・・・。」

少女は疲労困憊したように言った。

「クックック，ああ，確かに私は『ｓｉｃｋｌｅ』の幹部である。四天王の操水といえば有名だと思うが？」

『ｓｉｃｋｌｅ』の四天王とは組織内で１番上に位置する位で，全員で４人しかいない大幹部である・・・。

「！！！」

（何ですって・・・。よりによってあの四天王だったなんて・・・。・・・勝てない・・・わね・・・。）
少女は初めて死を覚悟した・・・。
（（（（おいっ，総牙やばいぞ！））））

「・・・どうした？」

総牙は思考を中断させられた所為か，怒気をはらんだ様子で答えた・・・。
（（（（見ろ！！！））））
そこには今にも殺されそうになっている少女と相変わらず下劣な笑いの男が見て取れた・・・。

「フンッ，オレにどうしろというんだ？オレには関係ない・・・。」

そう言った瞬間，総牙の脳裏にいつかの光景が蘇ってきた。

「ソウガ・・・。シ・・・ネ・・・。」
「ウオォォォォォ！！！」

キィーーン，
ズガァァァァーン！！！
総牙が絶叫した直後，一筋の光の刃がその空き家を直撃した。

「なにっ！雷だと！」

男は驚きを隠せない様子で総牙を見た。

「貴様！何処にいた？！！そして何をした！！！」
「キ・エ・ロ・・・。サ・モ・ナ・ク・バ・・・。」

総牙はおおよそ人とは思えない声で，搾り出すようにつぶやいた・・・。

「えぇい，黙れ！オレを誰だと思っている！」

どうでもいいがこの時，少女はあまりの展開に言葉を発せずにいた・・・。

「食らうがいい！いくぞ我が秘技！『操水陣』！」

そう男が叫んだ瞬間，降り注いでいた雨が一斉に総牙へと襲い掛かった。

「フ・ン。ヌルイ，ヌルイゾ・・・。」

総牙が手をかざした瞬間，水の塊が一瞬にして弾け飛んだ・・・。

「コノテイドデ四天王ヲナノルトハ，笑止！」

地獄からの響きのような声で総牙はつぶやいた・・・。

「ヨワキモノニ，イキルカチナシ・・・。キ・エ・ロ！」

地獄から響く力よ！いにしえの契約に従い，彼の者に永遠なる暗闇を・・・。

Ｅｘｔｉｎｃｔ！（消滅）

グワッッッ！！！

どす黒い球体が総牙の目の前に出現し，空き家の壁を飲み込んでいった・・・。

そのまま球体は男へ向かって飛翔する。

「ぐふっ！」

球体は男の左腕を消滅させ遠い彼方へと消えていった・・・。

「っく，貴様・・・。・・・この恨み，忘れんぞ！！！」

そう男は言い捨てると雨が一際強く降った。
収まる頃には，もう操水の姿は無かった・・・。

「ちっ，逃がしたか・・・。」

（（（（（総牙，やり過ぎじゃないか？これでは見つかるのも時間の問題だ・・・。））））

「分かってるって，でもあの時の光景とダブっちまってさ・・・。」

（（（（（・・・そうか。まだ吹っ切れてないのか・・・。））））

「・・・ほっとけ。・・・そういえばあの女は大丈夫か？」

総牙は気絶して倒れている少女に駆け寄った。

「おいっ！起きろ！，人が来るぞ。人が来ると色々と厄介なんだよ！」

そういう総牙だったが，少女は起きる気配がなかった・・・。

（（（（総牙，人が来るぞ，早くしろ！！！））））

「そんなこと言ったって起きないんだよ！！！」

（（（（（・・・仕方ない，つれて帰れ。））））

「冗談じゃない！そんなことできるか！」

（（（（（ならこのまま人に見つかるか？そんなことできんだろう。））））

「っく，人騒がせな奴だな・・・。」

そういうと，少女を抱えながら帰路に立つのであった・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9306e/

Ｓ・Ａ・Ｐ　～　Spirit and Power　～

2010年10月20日20時02分発行